群馬県立県民健康科学大学紀要　第10巻：１～23，2015

２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関する研究

―― 現状及び関係する教員の特性に焦点を当てて ――

伊 藤 美 鈴[1)]，松 田 安 弘[2)]，山 下 暢 子[2)]，吉富美佐江[2)]

１）高崎市医師会看護専門学校

２）群馬県立県民健康科学大学

目的：２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態の現状とそれに関係する教員の特性を明らかにし，望ましい状態に近づくための課題を検討する．

方法：２年課程看護専門学校全120校に所属する教員721名を対象とし，望ましい状態を示す「教育ニードアセスメントツール―看護学教員用―」（以下 FENAT）と「特性調査紙」を用い、郵送法による調査を行った．492名（回収率68.2％）より回答を得，統計学的手法を用いて分析を行った．

結果：① FENAT 得点は，34から109点であり，平均は76.1点であった．② FENAT の下位尺度のうち，【Ⅱ．研究成果を産出し社会に還元する】が最も高得点であった．③関係する変数は，［学会所属の有無］など13変数であり，最も強く関係する変数は［看護実践能力］であった．

結論：課題として，《研究遂行と研究成果の活用により教授活動を充実する》など６課題が導き出された．

キーワード：看護学教員，望ましい状態，２年課程看護専門学校

Ⅰ．緒　　言

本研究は,「２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する教員の特性はどのようなものか．また，２年課程看護専門学校教員が，看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題を具体的に理解し，課題克服に向かえるようになるにはどうしたらよいか.」という疑問に答えることを目的とする．

看護学教員は，将来看護職となる学生に直接的に関わる存在であり，質の高い教授活動を展開するために，また，学生のロールモデルとなるために，さらには，自分自身の発達のために，教育に携わる看護専門職としての看護学教員としての望ましい状態に近づいていくよう努める責任がある[1)]．本研究における看護学教員としての望ましい状態とは，教員が，習得したいと模倣し，憧れる自分以外の教員の態度や行動であり，希望の目標を達成するために必要とされる専門技能や個人特性を示す実現可能な模範を体現する教員の観察可能なふるまいを指す．

先行研究[2)]は，看護学教員としての望ましい状態に関係する特性が,「所属教育機関の種類」,「最終学歴」,「学会所属の有無」,「研究指導者の有無」など17特性であることを明らかにした.これらは，教員の教育・研究環境が，看護学教員としての望ましい状態に影響している可能性を示した．この研究は，大学，短期大学，専門学校などすべての看護基礎教育機関に所属する看護学教員を対象としていた．看護職養成教育機関の中でも，２年課

連絡先：〒370-0006 高崎市問屋町四丁目８番地11
高崎市医師会看護専門学校看護学科
伊藤美鈴

程看護専門学校に所属する看護学教員は，多様な背景を持つ学生を対象とする．具体的には，学生の年齢幅が広く，学歴や職歴など，入学前の経歴も多様である[3]．また，既に准看護師免許を取得し，准看護師として就業しながら看護学の学習をしている学生も存在する．このような背景をもつ学生に対し，２年課程看護専門学校教員は，学生のレディネスに応じた，質の高い教授活動を展開することに難渋している[4,5]．同時に，研究も遂行しにくい状況にある[6,7]．これらは，２年課程看護専門学校教員と他の教育機関に所属する教員の教育･研究環境，教育対象には差異[8]があり，その差異が看護学教員としての望ましい状態に影響する可能性を示す．また，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する教員の特性は解明されておらず，教員個々がその特性を兼ね備えているか否かを確認する指標がない．そこで，２年課程看護専門学校教員に焦点を当て，看護学教員としての望ましい状態に関係する特性を明らかにする必要がある．

以上を背景とする本研究は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する特性を明らかにし，２年課程看護専門学校教員が，看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題を検討することを試みる．２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する特性を明らかにすることは，その特性と自己の現状を照合し，自身がそれを兼ね備えているか否かを確認することを可能にする．また，２年課程看護専門学校教員個々が看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題を明確にし，課題を克服することを可能にする．

Ⅱ．研究目的

２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態の現状とそれに関係する教員の特性を明らかにし，２年課程看護専門学校教員が，看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題を検討する．

Ⅲ．用語の概念規定

１．２年課程看護専門学校 (two-year diploma program in nursing)

２年課程看護専門学校とは，准看護師免許を得た後，３年以上業務に従事している准看護師，または高等学校もしくは中等教育学校を卒業している准看護師であることを入学資格とする就業年限２年以上の看護専門学校である[9]．

２．看護学教員（nursing faculty members）

一般に，教員とは，教育行政の単位または対象として用いられる学校の教師に対する法律用語である[10]．また，看護学を教授する教員とは，保健師助産師看護師法第十九条[11]，第二十条[12]，第二十一条[13]に定める学校および看護師養成所に所属し，なおかつ看護師の資格を有する者[14]を指す．

以上を前提とし，本研究における看護学教員とは，看護基礎教育機関に所属し，看護師免許を所有し，看護学教育に携わる教員と規定する．

３．望ましい状態（ideal states）

望ましい状態[15,16]とは，個人が，習得したいと模倣し，憧れる自分以外の人の態度や行動であり，希望の目標を達成するために必要とされる専門技能や個人特性を示す実現可能な模範を体現する人物の観察可能なふるまいを指す．

Ⅳ．本研究の概念枠組み

１．概念枠組み（図１）

看護学教員の望ましい状態に関係する先行研究を概観し，望ましい状態に関係する可能性のある28変数を選定し概念枠組みを作成した．この28変数とは、教員特性に包含される［所属する学校の地域］[17]，［所属施設の設置主体］[18]，［所属教育機関

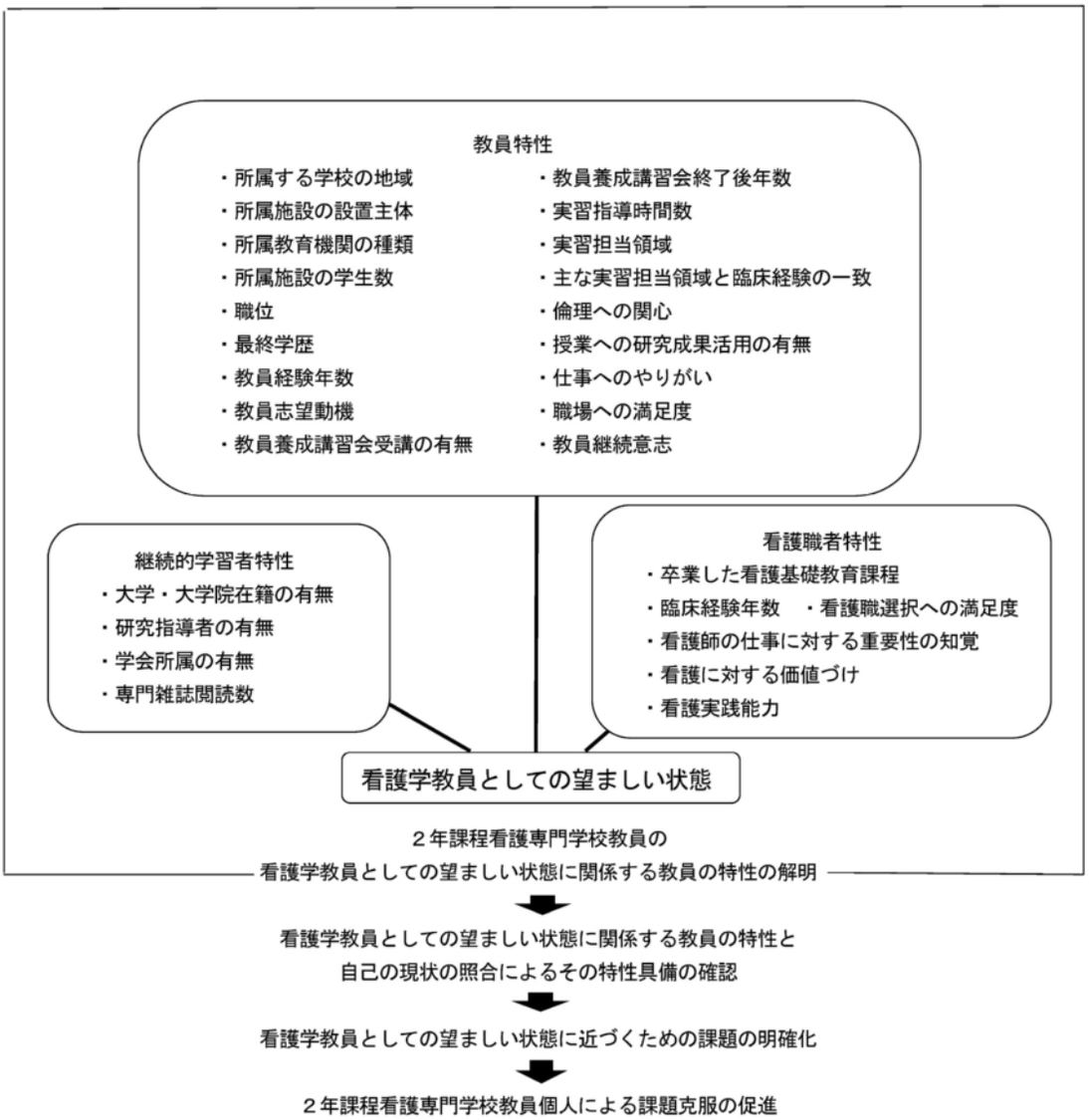

図１　本研究の概念枠組み

の種類][19]，[所属施設の学生数][20]，[職位][21]，[最終学歴][22]，[教員経験年数][23]，[教員志望動機][24]，[教員養成講習会受講の有無][25]，[教員養成講習会修了後年数][26]，[実習指導時間数][27]，[実習担当領域][28]，[主な実習担当領域と臨床経験の一致][29]，[倫理への関心][30]，[授業への研究成果活用の有無][31]，[仕事へのやりがい][32]，[職場への満足度][33]，[教員継続意志][34] の18変数，継続的学習者特性に包含される［大学・大学院在籍の有無][35]，[研究指導者の有無][36]，[学会所属の有無][37]，[専門雑誌閲読数][38]の４変数，看護職者特性に包含される[卒業した看護基礎教育課程][39]，[臨床経験年数][40]，[看護師の仕事に対する重要性の知覚][41]，[看護に対する価値づけ][42]，[看護職選択への満足度][43]，［看護実践能力][44] の６変数である．

２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する教員の特性の解明は，自己の現状の照合によりその特性具備の確認をすることを可能にする．そして，望ましい状態に近づくための課題を明確にし，課題の克服を促進することに繋がる．

2．用語の操作的定義

1）看護学教員としての望ましい状態

看護学教員としての望ましい状態とは，教員が，習得したいと模倣し，憧れる自分以外の教員の態度や行動であり，希望の目標を達成するために必要とされる専門技能や個人特性を示す実現可能な模範を体現する教員の観察可能なふるまいを指す．この看護学教員が知覚する教員の教育の必要性，教育ニードは教育に携わる看護専門職者としての望ましい状態と現状の乖離の程度である[45]．望ましい状態と現状の乖離の程度は，「教育ニードアセスメントツール―看護学教員用―」[46]（Educational Needs Assessment Tool for Nursing Faculty: FENAT，以下 FENAT と略す）に対する回答から算出される得点により表される．すなわち，FENAT の得点が低いほど望ましい状態に近いことを表わす．

2）教員特性

教員特性とは，後述する「特性調査紙」の質問項目のうち，［所属する学校の地域］，［所属施設の設置主体］，［所属教育機関の種類］，［所属施設の学生数］，［職位］，［最終学歴］，［教員経験年数］，［教員志望動機］，［教員養成講習会受講の有無］，［教員養成講習会修了後年数］，［実習指導時間数］，［実習担当領域］，［主な実習担当領域と臨床経験の一致］，［倫理への関心］，［授業への研究成果活用の有無］，［仕事へのやりがい］，［職場への満足度］，［教員継続意志］の18変数について問う質問項目への回答により表される．

3）継続的学習者特性

継続的学習者特性とは，後述する「特性調査紙」の質問項目のうち，［大学・大学院在籍の有無］，［研究指導者の有無］，［学会所属の有無］，［専門雑誌閲読数］の 4 変数について問う質問項目への回答により表される．

4）看護職者特性

看護職者特性とは，後述する「特性調査紙」の質問項目のうち，［卒業した看護基礎教育課程］，［臨床経験年数］，［看護師の仕事に対する重要性の知覚］，［看護に対する価値づけ］，［看護職選択への満足度］，［看護実践能力］の 6 変数について問う質問項目への回答により表される．

Ⅴ．研究方法

1．測定用具

本研究には，次の 2 種類の測定用具を用いた．

第 1 は、FENAT である．これは，教育に携わる看護専門職者としての望ましい状態と現状の乖離の程度を明らかにし，その乖離を小さくするために教育を要する側面を特定する測定用具であり，6 下位尺度30質問項目から構成される[47]．質問項目は，看護学教員としての望ましい状態を示し，選択肢は，「かなり当てはまる（1 点）」，「わりと当てはまる（2 点）」，「やや当てはまる（3 点）」，「ほとんど当てはまらない（4 点）」の 4 種類である．得点は，低いほどその看護学教員の現状が教育に携わる看護専門職者としての望ましい状態に近く，教育ニードが低いことを表す．教育ニードとは，望ましい状態と現状の間にある乖離であり，乖離のある看護職者が看護専門職者としての望ましい状態に近づくための教育の必要性である[48]．クロンバック α 信頼性係数は，0.95であり，内的整合性による信頼性を確保している[49]．また，構成概念妥当性は，因子分析により検証されている[50]．

第 2 は，特性調査紙である．これは，概念枠組みが包含する看護学教員の特性に関わる28変数を調査する質問紙である．内容妥当性は，専門家会議，及びパイロット・スタディにより確保した．

2．データ収集

データ収集には郵送法を採用し，質問紙を配布、回収した．

2 年課程看護専門学校180施設の教育管理責任者宛に，往復はがきを用いて研究協力を依頼した．

研究協力への承諾が得られた2年課程看護専門学校の教育管理責任者宛に，質問紙配布依頼状，質問紙(「FENAT」,「特性調査紙」)，返信用封筒，対象者への調査協力依頼状を同封し，送付した．対象となる教員個々に対しては，研究目的，研究の意義，調査の必要性，倫理的配慮，返信方法を明記した依頼状と返信用封筒を添付し，これを用いて回答を個別に投函するように依頼した．

3．データ収集期間

データ収集期間は，2013年6月21日から7月12日までであった．

4．データ分析

以下の手順によりデータ分析を行った．

1）回収した質問紙の回答を確認し，FENATに無記入の項目のあるものを除外し，有効回答を選別した．

2）コード表にしたがって回答を統計解析プログラムSPSS®（Statistics Version21 for Windows）に入力した．

3）2)により入力したデータをもとに，Kolmogorov-Smirnov検定を用い正規性を確認した．また，記述統計値（度数、平均、百分率、標準偏差)，推測統計値を算出した．量的説明変数とFENAT総得点及び下位尺度得点の関係については相関係数を算出した．質的説明変数とFENAT総得点及び下位尺度得点の関係についてはt検定，一元配置分散分析を行った．なお，定量的に測定した「所属施設の学生数」については，クラスサイズに影響を受けるため，それを考慮して定性化し,質的説明変数とした．また，複数回答を求めた実習担当領域については，実習担当領域数として単数及び複数の2群に分類した．さらに，一元配置分散分析の結果に基づき，有意性が認められた項目についてはTukeyの多重比較を行った．有意水準は0.05とした．

4）3）の単変量解析の結果に基づき，看護学教員としての望ましい状態との関係が認められた変数を説明変数，看護学教員としての望ましい状態を目的変数とし，ステップワイズ法による重回帰分析を行い，看護学教員としての望ましい状態に対する影響の強い看護学教員の特性を探索した．有意水準は0.05とした．その際，説明変数の独立関係が保たれているかを多重共線性の診断を行い確認した．また，その結果に基づき，看護学教員としての望ましい状態に関係する重要な変数を検討する基礎資料とすべく，βが0.2以上の変数に着目した．

5．倫理的配慮

倫理的配慮は，日本看護教育学学会研究倫理指針[51]に基づき，次のように行った．

対象者の所属する組織の意思決定を尊重するため,教育管理責任者宛に調査依頼はがきを送付し，承諾の得られた施設の協力可能な人数分の質問紙等の一式と対象者への調査協力依頼状を郵送した．教育管理責任者を通じて対象者に質問紙の配布を依頼する際には，対象者への調査協力依頼状に留意点を明記し，強制力が働かないよう対象者の任意による協力依頼であること，返信用封筒を用いた個別投函による回収であることを示した．また，教育管理責任者から質問紙等の書類一式を受けとった対象者に研究協力を依頼する際，研究目的，意義，内容，倫理的配慮を明示した調査協力依頼文書を添付した．また，回答に要する時間の目安を記載し，時間的負担の情報を提供した．倫理的配慮の内容として，自由意思に基づき研究参加を決定できるよう質問紙回収が返信用封筒を用いた個別投函によること，研究不参加により不利益が生じないこと，参加者の匿名性を確保する調査用紙は無記名とすること，研究結果を公表すること，研究成果発表時には，論述に十分配慮し，

個人や学校名を特定できる情報は公開しないこと，データはすべてコード化し統計的に処理すること，データの保管方法についても情報を提供した．また，研究者の問い合わせ先を明記し，問い合わせに迅速に対応できるようにした．

測定用具の使用にあたり，測定用具開発者（著作者）の権利[52]を保護するために，使用承諾を得て使用した．内容を変更することなく，出典を明示して著作権を保護した．

なお，本研究は，2013年３月15日，群馬県立県民健康科学大学倫理委員会による承認を得て調査を実施した．

Ⅵ．研究結果

研究協力を依頼した180施設のうち，120施設より承諾を得,721名の２年課程看護専門学校教員に質問紙を配布した．配布した調査票721部のうち492部が返送された（回収率68.2%）．このうち全ての質問項目に回答のあった467部を有効回答とし、分析を行った．

１．対象者の特性（表１）

対象者の性別は，女性434名（92.9%），男性18名(3.9%)，不明15名(3.2%)であった．年齢は，27歳から66歳の範囲であり，平均年齢は47.8歳（SD7.8)であった．所属教育機関の種類は，２年課程全日制161名（34.5%），２年課程昼間定時制181名（38.8%），２年課程夜間定時制81名（17.3%），２年課程通信制34名(7.3%)，不明10名(2.1%)であった．教員経験年数は，１年未満から37年であり，平均10.8年（SD7.8）であった．職位は，専任教員322名（69.0%），教務主任92名（19.7%），副校長･学校長16名（3.4%），その他26名（5.6%），不明11名（2.4%）であった．

表１　対象者の特性

n＝467

対象特性項目		項目の範囲・種類および度数			
教員特性	所属する学校の地域	北海道	24名（ 5.1%）	近畿	30名（ 6.4%）
		東北	39名（ 8.4%）	中国・四国	88名（18.8%）
		東京	18名（ 3.9%）	九州・沖縄	126名（27.0%）
		関東・甲信越	99名（21.2%）	不明	8名（ 1.7%）
		東海・北陸	35名（ 7.5%）		
	所属施設の設置主体	都道府県・市町村			96名（20.6%）
		社団・財団・医療・学校・社会福祉法人			165名（35.3%）
		医師会			173名（37.0%）
		その他			11名（ 2.4%）
		不明			22名（ 4.7%）
	所属教育機関の種類	２年課程全日制	161名（34.5%）	２年課程通信制	34名（ 7.3%）
		２年課程昼間定時制	181名（38.8%）	不明	10名（ 2.1%）
		２年課程夜間定時制	81名（17.3%）		
	所属施設の学生数	７名～633名	平均125.9名	SD105.4	
		100名未満	189名（40.4%）	200名以上	48名（10.3%）
		100名以上200名未満	196名（41.9%）	不明	35名（ 7.5%）
	職位	専任教員	322名（69.0%）	その他	26名（ 5.6%）
		教務主任	92名（19.7%）	不明	11名（ 2.4%）
		副校長・学校長	16名（ 3.4%）		
	最終学歴	高校卒	239名（51.2%）	大学院修了	36名（ 7.7%）
		短大卒	47名（10.1%）	その他	6名（ 1.3%）
		大学卒	129名（27.6%）	不明	10名（ 2.1%）
	教員経験年数	１年未満～37年	平均10.8年	SD7.8	
	教員志望動機	職場や出身校の関係者・友人など、他の人に勧められたから			118名（25.3%）
		職場の人事異動のため			53名（11.3%）
		看護の現状を考えると教育が大事であると考えたから			26名（ 5.6%）
		やりがいや充実感があるから			6名（ 1.3%）
		自分を成長させるため			31名（ 6.6%）

		教員が向いていると考えたから	9名（ 1.9%）		
		臨床より教育に興味を持ったから	21名（ 4.5%）		
		臨床も好きだが教育に興味を持ったから	72名（15.4%）		
		教員が自分の社会的地位を高めると考えたから	2名（ 0.4%）		
		仕事と家事・育児を両立させるため	24名（ 5.1%）		
		夜勤ができなかったから	9名（ 1.9%）		
		夜勤をしたくなかったから	7名（ 1.5%）		
		何となく	6名（ 1.3%）		
		その他	19名（ 4.1%）		
		不明	64名（13.7%）		
	教員養成講習会受講の有無	受講した　372名（79.7%）	受講していない　77名（16.5%）	不明　18名（ 3.9%）	
	教員養成講習会修了後年数	1年から37年	平均12.4年	SD8.5	
	実習指導時間数	0時間から1728時間／年	平均549.0時間／年	SD324.0	
	実習担当領域	基礎看護学	342名（73.2%）	母性看護学	116名（24.8%）
		成人看護学	247名（52.9%）	地域看護学	137名（29.3%）
		老年看護学	208名（44.5%）	精神看護学	168名（36.0%）
		小児看護学	144名（30.8%）	その他	69名（14.8%）
	主な実習担当領域と臨床経験との一致	一致している	246名（52.7%）	不明	34名（ 7.3%）
		一致していない	187名（40.0%）		
	倫理への関心	ある	396名（84.8%）	ない	0名（　0%）
		どちらともいえない	52名（11.1%）	不明	19名（ 4.1%）
	授業への研究成果活用の有無	活用している	154名（33.0%）	不明	18名（ 3.9%）
		活用していない	295名（63.2%）		
	仕事のやりがい	感じている	292名（62.5%）	感じていない	17名（ 3.6%）
		どちらともいえない	143名（30.8%）	不明	15名（ 3.2%）
	職場への満足度	満足している	147名（31.5%）	満足していない	88名（18.8%）
		どちらともいえない	217名（46.5%）	不明	15名（ 3.2%）
	教員継続意志	続けていこうと思う	185名（39.6%）	続けていこうと思わない	51名（10.9%）
		どちらともいえない	215名（46.0%）	不明	16名（ 3.4%）
継続的学習者特性	大学・大学院在籍の有無	在学している	56名（12.0%）	大学	36名（64.3%）
		在学していない	390名（83.5%）	大学院	20名（35.7%）
		不明	21名（ 4.5%）		
	研究指導者の有無	いる	223名（47.8%）	職場の上司	115名（51.6%）
		いない	218名（46.7%）	同僚の教員	30名（13.5%）
		不明	26名（ 5.9%）	職場外の教員	40名（17.9%）
				学生時代の教員	10名（ 4.5%）
				教員以外の看護職	6名（ 2.7%）
				その他	17名（ 7.6%）
				不明	5名（ 2.2%）
	学会所属の有無	所属している　188名（40.3%）	所属していない　258名（55.2%）	不明　21名（ 4.5%）	
	専門雑誌閲読数	0冊～29冊／月	平均2.5冊／月	SD2.6	
看護職者特性	卒業した看護基礎教育課程	高等学校専攻科	7名（ 1.5%）	短期大学（2年課程）	13名（ 2.8%）
		専門学校（3年課程）	220名（47.1%）	大学	30名（ 6.4%）
		専門学校（2年課程）	142名（30.4%）	その他	5名（ 1.1%）
		短期大学（3年課程）	40名（ 8.6%）	不明	10名（ 2.1%）
	臨床経験年数	2年～40年	平均12.6年	SD7.0	
	看護師の仕事に対する重要性の知覚	感じている	441名（94.4%）	感じていない	0名（　0%）
		どちらともいえない	10名（ 2.1%）	不明	16名（ 3.4%）
	看護に対する価値づけ	感じている	433名（92.7%）	感じていない	0名（　0%）
		どちらともいえない	19名（ 4.1%）	不明	15名（ 3.2%）
	看護職選択への満足度	満足している	382名（81.8%）	満足していない	3名（ 0.6%）
		どちらともいえない	67名（14.3%）	不明	15名（ 3.2%）
	看護実践能力	低い	10名（ 2.1%）	わりに高い	116名（24.8%）
		やや低い	53名（11.3%）	非常に高い	13名（ 2.8%）
		ふつう	258名（55.2%）	不明	17名（ 3.6%）
人口統計学的特性	性別	男性　18名（ 3.9%）	女性　434名（92.9%）	不明　15名（ 3.2%）	
	年齢	27歳～71歳	平均47.8歳	SD7.8	
	看護職の取得免許	看護師免許取得者	456名（97.6%）	保健師免許取得者	31名（ 6.6%）
		助産師免許取得者	39名（ 8.4%）		

2．FENAT 得点分布（表２）

対象者が獲得したFENAT総得点は，34点から109点の範囲であり，平均76.1点(SD13.5)であった．なお，FENAT総得点に関し，Kolmogorov-Smirnov検定を行った結果，統計量は0.645であり，FENAT得点の分布が正規分布であることを示した（df＝467，p＝0.800）．

また，各下位尺度の平均得点は，下位尺度【II．研究成果を産出し社会に還元する】が平均18.1点(SD3.3)と最も高く，以下，【IV．学習活動を継続して専門性の向上をめざす】平均12.5点(SD3.0)，【Ⅰ．質の高い教授活動を展開する】平均11.7点(SD2.7)，【V．自己の信念･価値観に基づき自立した職業活動を展開する】平均11.7点(SD3.0)，【III.組織の目標達成と維持発展に向けて多様な役割を適切に果たす】平均11.0点(SD3.3)，【VI．部下･後輩の成長を支援する】平均11.0点(SD6.7)と続いた．各下位尺度の得点と標準偏差を基に，各6下位尺度の平均(以下，SM)及び標準偏差（以下，SSD）を算出した結果，SM12.7､SSD2.7であった．また，このSMとSSDを用い，得点の平均が[SM＋SSD]，すなわち15.4を超える高得点下位尺度，得点の平均が［SM－SSD]，すなわち10.0未満の低得点下位尺度を検討した．その結果，高得点下位尺度は【II．研究成果を産出し社会に還元する】であり，低得点下位尺度は存在しなかった．

さらに，各質問項目の得点は，平均が1.9から3.8、標準偏差が0.6から0.9の範囲であった．30項目の内，高得点を獲得している項目，低得点を獲得している項目を明らかにするために，平均値を用いて順位化を行った．30項目の平均(以下，iM)及び標準偏差（以下，iSD）を算出した結果，iM2.7，iSD0.5であった．下位尺度得点と同様に，得点の平均が［iM＋iSD]，すなわち3.2を超える高得点項目，得点の平均が[iM－iSD]，すなわち2.2未満の低得点項目を抽出した．その結果，高得点項目は，下位尺度【II．研究成果を産出し社会に還元する】に含まれる《10．学会や研究会で研究成果を継続的に発表している》，《９．実践に役立つ成果の産出に向けて研究計画を丹念に検討している》，《７．看護実践や教育の質向上につながる研究に取り組んでいる》，《８．一貫したテーマをもって研究に取り組んでいる》，《６．看護や教育にかかわる現象を研究課題へとつなげている》の５項目であった．一方，低得点項目は，下位尺度【Ⅰ．質の高い教授活動を展開する】に含まれる《４．学生や自己の看護実践場面を具体例として授業に織り込んでいる》，下位尺度【III．組織の目標達成と維持発展に向けて多様な役割を適切に果たす】に含まれる《11．組織全体の中での仕事の優先順位を考え行動している》，《12．組織の中での自己の立場や役割を理解しメンバーシップを発揮している》，《14．組織の一員としての自己の役割を明確に自覚して行動している》，下位尺度【V．自己の信念・価値観に基づき自立した職業活動を展開する】に含まれる《21．他者の意見も尊重しつつ信念をもって自分の意見を述べている》の５項目であった．

表２　「教育ニードアセスメントツール―看護学教員用―」の下位尺度および項目得点　　n＝467

下位尺度：平均（標準偏差）	項　　目	平均（標準偏差）
Ⅰ．質の高い教授活動を展開する：　11.7（2.7）	１．教材や教具を工夫してわかりやすく授業を展開している	2.4（0.7）
	２．論理的に構成した授業を展開している	2.6（0.7）
	３．学生が抽象と具象を結びつけられるように授業を展開している	2.3（0.7）
	▼４．学生や自己の看護実践場面を具体例として授業に織り込んでいる	1.9（0.8）
	５．学生が主体的に学習できるよう授業の方法を工夫している	2.5（0.7）

II．研究成果を産出し社会に還元する： 18.1（3.3）	▲６．看護や教育にかかわる現象を研究課題へとつなげている	3.5（0.8）
	▲７．看護実践や教育の質向上につながる研究に取り組んでいる	3.6（0.8）
	▲８．一貫したテーマをもって研究に取り組んでいる	3.6（0.8）
	▲９．実践に役立つ成果の産出に向けて研究計画を丹念に検討している	3.7（0.7）
	▲10．学会や研究会で研究成果を継続的に発表している	3.8（0.6）
III．組織の目標達成と維持発展に向けて多様な役割を適切に果たす： 11.0（3.3）	▼11．組織全体の中での仕事の優先順位を考え行動している	1.9（0.8）
	▼12．組織の中での自己の立場や役割を理解しメンバーシップを発揮している	2.1（0.8）
	13．社会の動向を見すえ組織の発展を考えながら役割を遂行している	2.5（0.8）
	▼14．組織の一員としての自己の役割を明確に自覚して行動している	2.1（0.7）
	15．人的・物的資源を効果的に活用して組織内での多様な役割を果たしている	2.5（0.8）
IV．学習活動を継続して専門性の向上をめざす： 12.5（3.0）	16．専門誌に目を通して最新の情報を得ている	2.2（0.8）
	17．専門分野の学会に参加して最新の知見に触れている	2.7（0.9）
	18．同じ専門分野の人々と交流し学術的な刺激を得ている	3.0（0.9）
	19．図書やコンピュータなど自分自身の学習に必要な環境を整えている	2.3（0.8）
	20．自己の課題を克服するために必要な学習を行っている	2.4（0.8）
V．自己の信念・価値観に基づき自立した職業活動を展開する： 11.7（3.0）	▼21．他者の意見も尊重しつつ信念をもって自分の意見を述べている	2.1（0.7）
	22．正しいと思うことはどのようなことがあっても実現を目指す	2.6（0.8）
	23．問題や困難に遭遇してもあきらめることなく信念に基づき行動している	2.5（0.7）
	24．看護や教育に対する自己の信念に基づき一貫性のある行動をとっている	2.3（0.7）
	25．自己の判断基準に基づき職業上の意思決定を行っている	2.3（0.8）
VI．部下・後輩の成長を支援する： 11.0（6.7）	26．部下や後輩に対し経験や能力に応じて課題を示している	2.8（0.9）
	27．部下や後輩に対し不足している点を的確に指摘している	2.9（0.8）
	28．部下や後輩が学会や研修会などの学習機会を得られるように配慮している	2.8（1.0）
	29．部下や後輩が新たに役割に挑戦する機会を作っている	2.8（0.9）
	30．部下や後輩の教育・研究活動が向上するよう支援している	3.0（0.9）

注１：高得点下位尺度（平均が「全６下位尺度の平均＋標準偏差」を超えた下位尺度）を網掛けで示した。
注２：低得点下位尺度（平均が「全６下位尺度の平均－標準偏差」未満の下位尺度）は存在しなかった。
注３：高得点項目（平均が「全30項目の平均＋標準偏差」を超えた項目）を▲で示した。
注４：低得点項目（平均が「全30項目の平均－標準偏差」未満の項目）を▼で示した。

３．対象者の特性と FENAT 得点の関係（表３）

２年課程看護専門学校の看護学教員としての望ましい状態に関係する教員の特性の探索に向け，概念枠組みに示した28変数と FENAT 得点との関係を分析した．その結果，３特性28変数のうち13変数と FENAT 得点との間に統計学的に有意な関係を認めた($p<0.005$)．この13変数とは，教員特性に包含される［職位］，［最終学歴］，［教員経験年数］，［教員養成講習会修了後年数］，［授業への研究成果活用の有無］，［倫理への関心］，［仕事へのやりがい］，［教員継続意志］の８変数，継続的学習者特性に包含される［大学・大学院在籍の有無］，［学会所属の有無］，［専門雑誌閲読数］の３変数，看護職者特性に包含される［看護職選択への満足度］，［看護実践能力］の２変数であった．

各変数に関する結果は，FENAT 得点が低い，すなわち，看護学教員としての望ましい状態にある２年課程看護専門学校教員が，次のような特性を持つことを明らかにした．それは，《管理職である》，《大学院を修了している》，《教員経験年数が長い》，《教員養成講習会修了後の年数が長い》，《授業に研究成果を活用している》，《倫理への関心がある》，《仕事にやりがいを感じている》，《看護学教員を継続していく意志がある》，《大学・大学院に在籍している》，《学会に所属している》，《専門雑誌閲読数が多い》，《看護職を選択したことに満足感を感じている》，《看護実践能力が高いと自覚している》である．

表３　「教育ニードアセスメントツール―看護学教員用―」（FENAT）項目平均点

特　　性		N	FENAT 総得点(SD)	検定統計量
［教員特性］				
所属する学校の地域				$F=0.758$
	北海道	24	76.0（SD＝14.6）	
	東北	39	77.3（SD＝13.1）	
	東京	18	76.4（SD＝12.8）	
	関東・甲信越	99	74.0（SD＝13.8）	
	東海・北陸	35	73.5（SD＝14.1）	
	近畿	30	75.3（SD＝14.9）	
	中国・四国	88	77.2（SD＝13.2）	
	九州・沖縄	126	77.0（SD＝12.9）	
所属施設の設置主体				$F=0.006$
	都道府県・市町村	96	75.7（SD＝13.0）	
	社団・財団・医療・学校・社会福祉法人	168	75.2（SD＝13.0）	
	医師会	173	75.9（SD＝14.2）	
所属教育機関の種類				$F=0.495$
	２年課程全日制	161	75.0（SD＝14.0）	
	２年課程昼間定時制	181	76.3（SD＝13.6）	
	２年課程夜間定時制	81	76.5（SD＝12.6）	
	２年課程通信制	34	77.3（SD＝13.0）	
所属施設の学生数				$F=0.459$
	100名未満	189	76.1（SD＝13.9）	
	100名以上200名未満	196	75.6（SD＝13.4）	
	200名以上	48	77.7（SD＝12.5）	
最終学歴				$F=5.326^{*}$
	高校卒	239	77.8（SD＝12.4）	*
	短大卒	47	76.5（SD＝13.8）	*
	大学卒	129	74.7（SD＝14.3）	
	大学院修了	36	68.9（SD＝14.1）	（Tukey）
職位				$F=9.906^{***}$
	専任教員	322	77.6（SD＝13.4）	* *
	教務主任	92	73.5（SD＝12.5）	***
	副校長	16	64.6（SD＝13.7）	（Tukey）
教員経験年数	０年～37年	平均10.7年（SD7.8）		$r=-0.212^{**}$
教員志望動機				$F=1.384$
	内発的動機	175	75.3（SD＝13.6）	
	外発的動機	202	76.0（SD＝12.8）	
	動機不明確	6	84.2（SD＝12.3）	
教員養成講習会受講の有無				$t=-0.338$
	受講した	372	75.9（SD＝13.4）	
	受講していない	77	76.5（SD＝14.2）	
教員養成講習会修了後年数	１年から44年	平均12.4年（SD8.7）		$r=-0.207^{**}$
実習指導時間数	０時間から1728時間	平均550.0時間（SD322.8）		$r=0.052$
実習担当領域				$t=0.556$
	単数	68	75.5（SD＝14.7）	
	複数	368	75.6（SD＝13.3）	
主な実習担当領域と臨床経験との一致				$t=1.820$
	一致している	246	76.5（SD＝13.4）	
	一致していない	187	74.1（SD＝13.3）	
倫理への関心				$F=19.742^{***}$
	ある	396	74.8（SD＝13.2）	
	どちらともいえない	52	83.4（SD＝12.9）	
	ない	0	0（SD＝ 0 ）	
授業への研究成果活用の有無				$t=-7.845^{***}$
	活用している	154	69.3（SD＝13.2）	
	活用していない	295	79.2（SD＝12.3）	
仕事のやりがい				$F=11.172^{***}$
	感じている	292	73.8（SD＝13.1）	***
	どちらともいえない	143	79.1（SD＝13.4）	***
	感じていない	17	83.9（SD＝12.9）	（Tukey）

教員継続意志				$F=4.512^{*}$
	続けていこうと思う	185	73.7（SD＝12.7）	
	どちらともいえない	215	76.9（SD＝13.4）	
	続けていこうと思わない	51	78.9（SD＝15.4）	
職場への満足度				$F=1.823$
	満足している	147	74.8（SD＝13.3）	
	どちらともいえない	217	75.6（SD＝13.4）	
	満足していない	88	78.2（SD＝13.7）	
［継続的学習者特性］				
大学・大学院在籍の有無				$t=-2.660^{**}$
	在学している	56	71.7（SD＝12.3）	
	在学していない	390	76.8（SD＝13.4）	
大学・大学院在籍				$t=2.498^{*}$
	大学	36	74.6（SD＝11.5）	
	大学院	20	66.5（SD＝12.1）	
研究指導者の有無				$t=-1.622$
	いる	223	74.7（SD＝12.8）	
	いない	218	76.4（SD＝13.5）	
学会所属の有無				$t=-6.738^{***}$
	所属している	188	71.0（SD＝13.3）	
	所属していない	258	79.3（SD＝12.6）	
専門雑誌閲覧数	０冊～29冊	平均2.5冊（SD2.6）		$r=-0.203^{***}$
［看護職者特性］				
卒業した看護基礎教育課程				$F=1.770$
	高等学校専攻科	7	75.1（SD＝ 7.2）	
	専門学校（３年課程）	220	75.3（SD＝12.6）	
	専門学校（２年課程）	142	78.7（SD＝13.9）	
	短期大学（３年課程）	40	73.7（SD＝12.8）	
	短期大学（２年課程）	13	72.5（SD＝15.6）	
	大学	30	74.8（SD＝16.2）	
	その他	5	67.8（SD＝10.4）	
臨床経験年数	２年～40年	平均12.7年（SD7.0）		$r=0.039$
看護師の仕事に対する重要性の知覚				$F=2.534$
	感じている	441	75.7（SD＝13.3）	
	どちらともいえない	21	82.5（SD＝15.9）	
	感じていない	0	0（SD＝ 0）	
看護に対する価値づけ				$F=3.120$
	感じている	433	75.6（SD＝13.3）	
	どちらともいえない	19	81.2（SD＝16.0）	
	感じていない	0	0 （SD＝ 0）	
看護職選択への満足度				$F=3.789^{*}$
	満足している	382	75.1（SD＝13.3）	
	どちらともいえない	67	80.0（SD＝14.0）	
	満足していない	3	77.7（SD＝ 0.6）	
看護実践能力				$F=12.693^{***}$
	低い	10	89.2（SD＝11.1）	
	やや低い	53	79.0（SD＝12.2）	
	ふつう	258	77.5（SD＝13.0）	
	わりに高い	116	71.0（SD＝12.7）	
	非常に高い	13	61.8（SD＝13.2）	

（Tukey）

*：$p<0.05$　**：$p<0.01$　***：$p<0.001$

４．FENAT 得点と統計学的に有意な関係が認められた変数の関係

１）FENAT 得点と統計学的に有意な関係が認められた13変数のうち最も影響の強い変数（表４）

重回帰分析の結果，目的変数 FENAT 得点に対する β が0.2以上の説明変数は，看護実践能力（$\beta=-0.249$、$p=0.000$）であった（$R^2=0.334$、$p<0.001$）．FENAT 得点と統計学的に有意な関係が認められた13変数のうち最も影響の強い変数

表４　「教育ニードアセスメントツール―看護学教員用―」得点と
統計学的に有意な関係が認められた変数の関係

	B	β	t	Bの信頼区間	
				下限	上限
授業への研究成果活用の有無	5.360	0.196**	3.997	2.722	7.988
看護実践能力	−4.386	−0.249**	−5.231	−6.036	−2.736
職位	−2.109	−0.123*	−2.516	−3.759	−0.460
学会所属の有無	3.370	0.126*	2.536	0.756	5.985
仕事のやりがい	3.423	0.132**	2.695	0.924	5.921
専門雑誌閲読数	−0.767	−0.131**	−2.783	−1.310	−0.225
大学・大学院在籍の有無	3.766	0.098*	2.108	0.250	7.282
最終学歴	−1.199	−0.099*	−2.096	−2.325	−0.074
倫理への関心	4.974	0.096*	2.025	0.141	9.806
重相関係数（R^2）	0.334				

*: $p<0.05$　**: $p<0.01$
除外された変数　［教員経験年数］、［教員養成講習会修了後年数］、［教員継続意志］、［看護職選択への満足度］

は看護実践能力であった．除外された変数は，［教員経験年数］，［教員養成講習会修了後年数］，［教員継続意志］，［看護職選択への満足度］であった（基準：投入するＦの確立≦0.050，除去するＦの確立≧0.100）．

なお，多重共線性の診断の結果，独立変数の中で固有値が０に近く，条件指標の値が大きく，分散の比率が大きい独立変数は存在しなかった．

２）FENAT 得点と統計学的に有意な関係が認められた変数相互の関係

FENAT 得点と統計学的に有意な関係が認められた13変数相互の関係を探索するために，変数各々に対し，当該変数を目的変数，他の変数を説明変数とする強制投入法による重回帰分析を行った．有意水準は0.05とした．その際、説明変数の独立関係が保たれているかを多重共線性の診断を行い確認した．また，その結果に基づき，FENAT 得点に関係する重要な変数を検討する基礎資料とすべく，β が0.2以上の変数に着目した．

⑴　職位

目的変数［職位］に対する β が0.2以上の説明変数は、［教員養成講習会修了後年数］（$\beta=0.446$、$p=0.000$）であった（$R^2=0.303$，$p<0.001$）．

⑵　教員経験年数

目的変数［教員経験年数］に対する β が0.2以上の説明変数は［教員養成講習会修了後年数］（$\beta=0.744$、$p=0.000$）であった（$R^2=0.702$，$p<0.001$）．

⑶　教員養成講習会修了後年数

目的変数［教員養成講習会修了後年数］に対する β が0.2以上の説明変数は［教員経験年数］（$\beta=0.747$，$p=0.000$）であった（$R^2=0.701$，$p<0.001$）．

⑷　授業への研究成果活用の有無

目的変数［授業への研究成果活用の有無］に対する β が0.2以上の説明変数は［学会所属の有無］（$\beta=0.207$，$p=0.000$）であった（$R^2=0.136$，$p<0.001$）．

⑸　仕事へのやりがい

目的変数［仕事へのやりがい］に対する β が0.2以上の説明変数は［教員継続意志］（$\beta=0.439$，$p=0.000$）であった（$R^2=0.381$，$p<0.001$）．

⑹　教員継続意志

目的変数［教員継続意志］に対する β が0.2以上の説明変数は［仕事へのやりがい］（$\beta=0.501$，$p=0.000$）であった（$R^2=0.293$，$p<0.001$）．

(7) 専門雑誌閲読数

目的変数［専門雑誌閲読数］に対する β が0.2以上の説明変数は［教員経験年数］（$\beta=0.202$, $p=0.040$）であった（$R^2=0.092$, $p<0.001$）.

(8) 看護職選択への満足度

目的変数［看護職選択への満足度］に対する β が0.2以上の説明変数は［仕事へのやりがい］（$\beta=0.249$, $p=0.000$）であった（$R^2=0.123$, $p<0.001$）.

以上，FENAT 得点と統計学的に有意な関係が認められた変数相互の関係の保持に際し、多重共線性の診断を行った。その結果、独立変数の中で固有値が 0 に近く、条件指標の値が大きく、分散の比率が大きい独立変数は存在しなかった。

Ⅶ．考　　察

本研究は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態の現状とそれに関係する教員の特性を明らかにし，２年課程看護専門学校教員が，看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題を検討することを目的とする．この目標達成に向け，質問紙を用いた全国調査を実施し，データの収集と分析を行った．

そこで，目的を達成するために結果に基づき，第１に，収集したデータの特徴を検討し，本研究の目的を達成するための適切性を確認する．第２に，結果として明らかになったわが国の２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態の特徴を考察する．第３に，わが国の２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する教員の特性を考察し，望ましい状態に近づくための課題を検討する．

１．本研究におけるデータの適切性

本研究は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態の現状とそれに関係する教員の特性を明らかにし，２年課程看護専門学校教員が，看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題を検討することを目的とする．この目的の達成を目ざし，一般化できる結果を得るためには，様々な背景から構成される多くの２年課程看護専門学校教員からデータを収集する必要がある．そのため，本研究は，全国の２年課程看護専門学校に所属する看護学教員を対象とした悉皆調査を実施し，68.2％の回収率を得た．

また，Ⅴ．研究方法で述べた手続きを経てデータを収集した結果,本研究の対象者467名の構成は次の通りであった．

所属施設の設置主体は,都道府県62名(13.3％)，市町村34名（7.3％），社団法人33名（7.1％），財団法人42名（9.0％），医療法人21名（4.5％），学校法人66名（14.1％），医師会173名（37.0％），社会福祉法人３名（0.6％），その他11名（2.4％），不明22名（4.7％）であった．所属する学校の地域は，北海道24名（5.1％），東北39名（8.4％），東京18名（3.9％），関東･甲信越99名（21.2％），東海･北陸35名（7.5％），近畿30名（6.4％），中国･四国88名（18.8％），九州・沖縄126名（27.0％），不明８名（1.7％）であった．本研究の母集団である２年課程専門学校教員が所属する施設の設置主体は，都道府県13.6％，市町村6.0％，公益法人11.1％，医療法人9.0％，学校法人15.6％，医師会41.2％，社会福祉法人2.5％，その他1.0％である[53]．所属する学校の地域は，北海道6.4％，東北9.1％，東京7.5％，関東・甲信越23.0％，東海・北陸6.4％，近畿11.8％，中国･四国15.0％，九州･沖縄20.8％である[54]．これらは,本研究の対象者の構成が母集団の比率と概ね合致し，収集したデータが母集団の特性を反映していることを示す．

以上は，悉皆調査により協力の得られた対象者に，背景が多様かつ母集団の特性を反映している２年課程看護専門学校教員を含んでおり，明らかになった２年課程看護専門学校教員の看護学教員

としての望ましい状態の現状とそれに関係する教員の特性が，一般化できる結果を得る可能性を示す．そこで，これを前提として考察を進める．

２．わが国の２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態の特徴

本研究の結果は，わが国の２年課程看護専門学校教員の FENAT 総得点が34点から109点の範囲であり，平均76.1点（SD13.5）であることを明らかにした．FENAT は，得点可能範囲が30点から120点であり，得点が低いほど，その看護学教員の現状が，教育に携わる看護専門職者としての望ましい状態に近く，教育ニードが低いことを示す．対象者が獲得した平均76.1点という値は，わが国の２年課程看護専門学校教員が FENAT を用いた測定により獲得できる最低点30点より46.1点分乖離しており，看護学教員としての望ましい状態に近づけることを必要としている現状を表す．

また，下位尺度の平均と標準偏差を用いて低得点下位尺度を抽出した結果，該当する下位尺度は存在しなかった．さらに，項目平均と標準偏差を用いて，低得点項目を抽出した結果，該当する項目が５項目存在し，それは、下位尺度【Ⅰ．質の高い教授活動を展開する】に含まれる《４．学生や自己の看護実践場面を具体例として授業に織り込んでいる》，下位尺度【Ⅲ．組織の目標達成と維持発展に向けて多様な役割を適切に果たす】に含まれる《11．組織全体の中での仕事の優先順位を考え行動している》，《12．組織の中での自己の立場や役割を理解しメンバーシップを発揮している》，《14．組織の一員としての自己の役割を明確に自覚して行動している》，下位尺度【Ⅴ．自己の信念・価値観に基づき自立した職業活動を展開する】に含まれる《21．他者の意見も尊重しつつ信念をもって自分の意見を述べている》であった．FENAT は，得点が低いほどその看護学教員の現状が望ましい状態にあり，教育ニードが低いことを表すため，これらは，２年課程看護専門学校教員が，日頃から質の高い教授活動を展開するために学生や自己の看護実践場面を具体例として授業に織り込んでいることを表す．同時に，学校組織の一員としての自己の役割を明確に自覚し，信念をもって行動していることを表す．

先行研究[55]は，２年課程看護専門学校を含む専門学校教員が，学生への生活指導・進路相談，看護師免許取得支援など複数の役割を同時に担うようになり，充実感を感じる一方，不全感も感じる経験をすることを明らかにした．一方，本研究の結果は，看護学教員としての望ましい状態にある２年課程看護専門学校教員が，学校組織の一員としての自己の役割を明確に自覚している存在であることを示した．本研究と先行研究の結果は，２年課程看護専門学校教員の役割に対する自覚や認識のしかたにより，充実感につながることもあれば，不全感を生じさせ役割葛藤をもたらす可能性もあることを示す．これらは，２年課程看護専門学校教員が，役割葛藤を生じさせることなく，充実した教育活動を展開するためには，教員としての役割を明確に自覚し，自己の信念に基づきそれを遂行する必要があり，これにより看護学教員としての望ましい状態に近づくことを示唆する．

また，下位尺度の平均と標準偏差を用い高得点下位尺度を抽出した結果，下位尺度【Ⅱ．研究成果を産出し社会に還元する】がこれに該当した．さらに，項目平均と標準偏差を用い，高得点項目を抽出した結果，該当する項目が５項目存在し，それは，下位尺度【Ⅱ．研究成果を産出し社会に還元する】に含まれる《10．学会や研究会で研究成果を継続的に発表している》，《９．実践に役立つ成果の産出に向けて研究計画を丹念に検討している》，《７．看護実践や教育の質向上につながる研究に取り組んでいる》，《８．一貫したテーマをもって研究に取り組んでいる》，《６．看護や教育にかかわる現象を研究課題へとつなげている》で

あった．FENAT は，得点が高いほどその看護学教員の現状が望ましい状態から乖離しており，教育ニードが高いことを表す．これらは，２年課程看護専門学校教員にとって，研究成果を産出し社会に還元する行動の改善，とりわけ，看護や教育にかかわる現象を研究課題へとつなげ，実践に役立つ研究に一貫して取り組み，その成果の発表を継続的に行えることが課題であることを示唆する．

しかし，２年課程看護専門学校教員は，この課題達成に向けて行動し難い状況にある．大学には，各教員の専攻研究領域の研究活動を組織的に支援する科学研究費補助金以外にも大学改革推進費，カリキュラム改革調査研究費，外部評価経費，学外体験学習実践支援経費，補習教育充実費，さらに大学教育方法等改善経費などさまざまな研究活動が年度ごとに組織される．また，大学は，「学術の中心として，広く知識を授けるとともに，深く専門の学芸を教授研究し，知的，道徳的及び応用的能力を展開させること」[56] を目的としている．一方，専修学校（専門学校）は，「職業若しくは実際生活に必要な能力を育成し，又は教養の向上を図ること」[57] を目的とし，大学の目的が表す「学芸の教授研究」を内容に含めていない．これらは，看護専門学校が，看護職に必要な能力の育成を第１義的な目的とし，大学のように学問を教授・研究することを主目的としていないため，研究が推進されにくい状況にあることを示す．しかし，看護学の教育内容は，研究成果の累積により学術として体系化されるものであり，教員の研究活動は教育のために不可欠である[58]．そのため，看護専門学校のように，研究遂行のためのシステムが十分に整っていない教育組織では，教員個々の職業意識に基づいた積極的な研究活動を求められる．先行研究[59−62] は，わが国の看護専門学校教員が研究を実施したり，研究成果を活用することを十分に行えていない現状を明らかにした．このような現状を打開するためには，自己点検評価などにより，研究活動や研究成果活用の促進に向け改善が必要な点を明確にするとともに，研究費や研究時間の確保，学習資源の体系化など，研究活動を活性化するシステムへの参加[63] から実践していくことが重要である．これらは，２年課程看護専門学校教員個々人が，所属施設の組織運営の一環として，研究活動を活性化するためのシステム構築に主体的に参画する必要があることを示す．また，看護系学会に参加し，産出した研究成果を発表したり，最新の情報を入手したりすることを積極的に行い，それらを自己の教育活動に反映させることを通して，システム構築の意義を示す必要があることを示す．

以上は，２年課程看護専門学校教員が，看護学教員としての望ましい状態に近づくために，研究活動を活性化するためのシステム構築への参画と研究成果の教育活動への反映が重要であることを示唆する．

３．わが国の２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する教員の特性

本研究は，文献検討を通して構築した概念枠組みに基づき，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する13変数を明らかにした．この13変数とは，［職位］，［最終学歴］，［教員経験年数］，［教員養成講習会修了後年数］，［授業への研究成果活用の有無］，［倫理への関心］，［仕事へのやりがい］，［教員継続意志］，［大学・大学院在籍の有無］，［学会所属の有無］，［専門雑誌閲読数］，［看護職選択への満足度］，［看護実践能力］である．各変数に関する結果は，FENAT 得点が低い，すなわち，看護学教員としての望ましい状態にある２年課程看護専門学校教員が，次のような特性を持つことを明らかにした．それは，《管理職である》，《大学院を修了してい

る》,《教員経験年数が長い》,《教員養成講習会修了後の年数が長い》,《授業に研究成果を活用している》,《倫理への関心がある》,《仕事にやりがいを感じている》,《看護学教員を継続していく意志がある》,《大学・大学院に在籍している》,《学会に所属している》,《専門雑誌閲読数が多い》,《看護職を選択したことに満足感を感じている》,《看護実践能力が高いと自覚している》である．本研究の探求のレベルは関係探索であり，関係探索研究は，研究結果に基づき変数を相互に結びつける概念的な連鎖を検討し，次の探求のレベルである関連検証研究において検証すべき仮説を提示することに意義を持つ[64]．そこで，本項においては，2年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態との関係が認められた13変数の概念的連鎖について，変数相互の関係を探索した結果を踏まえ，先行研究の結果に照らして考察し，2年課程看護専門学校教員の望ましい状態に関係する重要な特性を検討した．また，それを通し，2年課程看護専門学校教員が，看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題を検討する．

第1に着目した変数は，［最終学歴］，［大学･大学院在籍の有無］である．本研究の結果は，大学院を修了した2年課程看護専門学校教員が，修了していない教員よりも看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．また，大学・大学院に在籍している2年課程看護専門学校教員が，在籍していない教員よりも看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．さらに，大学・大学院に在籍している者のうち，大学院に在籍している2年課程看護専門学校教員が，大学に在籍している教員よりも看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．このことは，学士，修士，博士という学位取得につながる教育課程の修了が，2年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に近づくことに影響することを示唆する．学とは体系化された知識であり，事物の構造や法則を探求する人間の理性的な認識活動およびその所産としての理論的，体系的な知識である科学と同義である[65]．看護職は専門職性の高い職業であり，その専門職化を進展し，専門職としての基準を満たすためには，職務遂行の基礎として学ぶ知識の体系化が必要である[66]．学位取得につながる教育課程の修了は，学的知識を基盤とした教育を展開するための条件となる．

以上は，2年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題として，学的基盤に基づく自己の準備状態を整える必要があることを示唆した．

第2に着目した変数は，［職位］，［仕事へのやりがい］，［教員継続意志］，［教員経験年数］，［教員養成講習会修了後年数］，［専門雑誌閲読数］である。このうち，［職位］に関する結果は，管理職である2年課程看護専門学校教員が，専任教員よりも看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．職位とは公式組織の構成単位であり[67]，一般に，職位は，職業経験と業績を積むことを通して高くなっていく．また，それぞれの職位には，公式に期待される一定の職務があり[68]，職業経験を積み，職位が高くなることは，その個々人の職業経験の量，質ともに豊かになることを表す。そのため，職位に関する結果は，個々人の看護学教員としての職業経験の量と質が，2年課程看護専門学校教員の看護学教員として望ましい状態に関係する可能性を示唆する．

また，［仕事へのやりがい］，［教員継続意志］の2変数間の関係に関する結果は，仕事にやりがいを感じている2年課程看護専門学校教員ほど看護学教員を継続していく意志が強いことを示した．専門学校教員の職業経験を解明した研究[69]は，教員が，経験を積み重ね様々な役割を担うようになり，充実を感じることを明らかにした．これらは，職業経験の累積を通して仕事へのやりがいを感じ取れるようになり，またそれが，教員を継続して

いく意志につながっていくことを示唆する．

さらに，本研究の結果は，教員経験年数，教員養成講習会修了後年数が長く，専門雑誌閲読数が多いほど，看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．同時に，この３変数と上述の職位が相互に関係し，教員養成講習会修了後年数の長い者ほど教員経験年数の長いこと，職位が高い者ほど教員養成講習会修了後年数の長い傾向にあること，教員経験年数が長いほど専門雑誌閲読数が多いことを示した．

以上は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に，職業経験の量と質が影響している可能性が高いことを示し，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題として，自己の職業経験を量・質ともに豊かにする必要があることを示唆した．

第３に着目した変数は，［仕事へのやりがい］，［教員継続意志］，［看護職選択への満足度］である．本研究の結果は，看護学教員の仕事へのやりがい，看護学教員を継続していく意志，看護職を選択したことへの満足感を強く知覚している２年課程看護専門学校教員ほど，看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．また，［仕事へのやりがい］，［教員継続意志］，［看護職選択への満足度］の３変数間の関係に関する結果は，看護学教員を継続していく意志，看護職を選択したことへの満足感を強く知覚している２年課程看護専門学校教員ほど，看護学教員の仕事へのやりがいを強く知覚していることを示した．看護職選択への満足感を強く知覚している２年課程看護専門学校教員が，将来看護師となる学生への教育に携わるという自己の仕事にやりがいを強く知覚していることは容易に推察でき，これらは、看護学教員としての望ましい状態にある２年課程看護専門学校教員が，臨床看護師や看護学教員をも含む看護職を価値づけていることの反映である可能性を示唆する．価値とは、主観ないしは，自己の要求，とくに感情や意志の要求をみたすものをいい，価値が生ずるためには対象に関係する評価作用が予想される[70]．経験を通して職業の要件を具体化し，他者評価や自己評価を繰り返しながら自己の内部に個人的価値を形成していく[71]．

以上は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題として，看護職を価値づけられるような経験を重ねていく必要があることを示唆する．

第４に着目した変数は，［倫理への関心］である．本研究の結果は，倫理への関心が高い２年課程看護専門学校教員ほど，看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．また，変数間の関係を探索するための重回帰分析の結果は，目的変数［倫理への関心］に対し，標準偏回帰係数 β が0.2以上となる説明変数が存在しないことを明らかにした．このことは，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態との間に有意な関係が認められた看護学教員の特性に関わる他の12変数から独立して［倫理への関心］が説明されることを示す．

倫理に関わる看護学教育に焦点を当てた２年課程看護専門学校教員による研究は，増加傾向にあり，教育内容の実態[72,73]，効果的な教授方法[74]などを明らかにした．これらの研究結果は，２年課程看護専門学校教員が，倫理に関わる教育に高い関心をもつとともに，それを系統的かつ効果的に提供するための方法を探求していることを示す．また，学生が知覚する看護学教員のロールモデル行動に関する研究[75]は，学生が教員の示す複数の行動をロールモデル行動として知覚し，その中には，倫理的な行動が複数含まれていることを明らかにした．看護学教員のロールモデル行動は，学生が看護専門職者としての態度を修得するために重要な機能を果たす[76]．これらは，倫理的行動のとれる看護職者の育成に向け，看護学教員の示す倫理的

行動が不可欠であることを示す．しかし，２年課程看護専門学校教員は，他の教育課程に所属する教員よりも倫理的行動を十分にとれていない現状がある[77]．

以上は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題として，倫理に関わる教育に関心をもち，学生のロールモデルとなるような行動をとれるよう努力する必要があることを示唆する．

第５に着目した変数は,［授業への研究成果活用の有無］,［学会所属の有無］である．本研究の結果は，授業に研究成果を活用している，学会に所属している２年課程看護専門学校教員ほど，看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．また,［授業への研究成果活用の有無］,［学会所属の有無］の２変数間の関係に関する結果は，授業に研究成果を活用している２年課程看護専門学校教員ほど，看護学や他学問分野の学会に所属していることを示した．

学会とは,「学者･研究者が新しい情報や研究成果を披露しあうとともに，学会誌の刊行などを通じて当該分野の維持発展のために組織している団体」[78] である．看護学教員は自己の専門分野の学会に所属することにより，学術集会や学会誌を通して新しい情報や研究成果を他者に公開する機会を得る．また，他の学会員の発表を通し，自らが新たな情報や研究成果に触れる機会を得る．学会への所属は任意であり，それは，会費等の経済的負担も伴う．そのため,「学会に所属している」という状況は，その教員が，専門分野に関し，産出した研究成果を発表したり，最新の情報を入手したりすることを主体的に行っており，研究遂行と研究成果活用への主体性が高いことを示唆する．

また、看護学教員は、自身の研究遂行や研究成果の活用のみならず、これらに関する学生への教育を充実させる必要がある。研究成果を実践に活用できる看護職を育成するためには、学生が、研究成果活用の意義や重要性を価値づける[79] ことが重要であり、看護学教員は、その習得に向けて質の高い教授活動を展開することが求められる。授業構築は、その科目の担当者にゆだねられており、授業に研究成果を活用するか否かは自らの意志による。先行研究[80] は、２年課程看護専門学校教員の研究成果活用に関わる教授活動があまり充実しておらず、効果的な教授活動に向け、研究に関する知識、研究結果を批評する力が必要であることを指摘している。

以上は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題として，研究遂行と研究成果の活用により教授活動を充実する必要があることを示唆する．

最後に着目したのは,［看護実践能力］である．本研究の結果は，看護実践能力が高いと知覚している２年課程看護専門学校教員ほど，看護学教員としての望ましい状態に近いことを示した．また，変数間の関係を探索するための重回帰分析の結果は，目的変数［看護実践能力］に対し，標準偏回帰係数 β が0.2以上となる説明変数が存在しないことを明らかにした．このことは，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態との間に有意な関係が認められた看護学教員の特性に関わる他の12変数から独立して［看護実践能力］が説明されることを示唆する．さらに，看護学教員としての望ましい状態との関係が認められた13変数を説明変数，看護学教員としての望ましい状態を目的変数として重回帰分析を行い，看護学教員としての望ましい状態に対する影響の強い看護学教員の特性を探索した結果，目的変数に対する β が0.2以上の説明変数は，看護実践能力であった．

今後の看護教員のあり方に関する検討会報告[81] は，教員が、学生等に適切に教えることを目的として，看護の基本技術に加え，最新の医療に関する技術や知識を有し，看護を実践する能力を兼ね

備えている必要性を示した．また，先行研究[82,83]は，専門学校教員が，教育経験の長期化による看護実践能力低下への危惧や看護実践能力への自信のなさを感じていることを明らかにし，教員の看護実践能力向上の必要性を指摘している．

以上は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題として，看護実践能力の向上を図る必要があることを示唆する．

本研究は，看護実践能力を，「低い」から「非常に高い」までの５つの選択肢を用い定性的に測定した．そのため，「看護学教員は、看護実践能力が高いほど望ましい状態にある」ことは示唆されるものの，これを経験的に検証された命題とみなすことはできない．これを仮説とし，[看護実践能力]を定量的に厳密に測定することが今後の研究課題である．

Ⅷ．結　　論

１．わが国の２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態を表すFENAT総得点は，34点から109点の範囲であり，平均76.1点であった．平均76.1点という値は，わが国の２年課程看護専門学校教員がFENATを用いた測定により獲得できる最低点30点より46.1点分乖離しており，さらに看護学教員としての望ましい状態に近づける必要があることを示した．

２．FENAT高得点下位尺度は，【II．研究成果を産出し社会に還元する】であり，低得点下位尺度は存在しなかった．

３．FENAT30項目のうち，高得点項目は，下位尺度【II．研究成果を産出し社会に還元する】に含まれる《10．学会や研究会で研究成果を継続的に発表している》，《９．実践に役立つ成果の産出に向けて研究計画を丹念に検討している》，《７．看護実践や教育の質向上につながる研究に取り組んでいる》，《８．一貫したテーマをもって研究に取り組んでいる》，《６．看護や教育にかかわる現象を研究課題へとつなげている》の５項目であった．

４．FENAT30項目のうち，低得点項目は，下位尺度【Ⅰ．質の高い教授活動を展開する】に含まれる《４．学生や自己の看護実践場面を具体例として授業に織り込んでいる》，下位尺度【III．組織の目標達成と維持　発展に向けて多様な役割を適切に果たす】に含まれる《11．組織全体の中での仕事の優先順位を考え行動している》，《12．組織の中での自己の立場や役割を理解しメンバーシップを発揮している》，《14．組織の一員としての自己の役割を明確に自覚して行動している》，下位尺度【Ⅴ．自己の信念･価値観に基づき自立した職業活動を展開する】に含まれる《21．他者の意見も尊重しつつ信念をもって自分の意見を述べている》の５項目であった．

５．２年課程看護専門学校教員の特性に関する次の13変数は，２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する．

13変数とは，[職位]，[最終学歴]，[教員経験年数]，[教員養成講習会修了後年数]，[授業への研究成果活用の有無]，[倫理への関心]，[仕事のやりがい]，[教員継続意志]，[大学・大学院在籍の有無]，[学会所属の有無]，[専門雑誌閲読数]，[看護職選択への満足度]，[看護実践能力]である．

６．２年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関係する13変数のうち，最も強く関係する変数は[看護実践能力]である．

７．２年課程看護専門学校教員が，看護学教員としての望ましい状態に近づくための課題は次の６点である．

１）学的基盤に基づく自己の準備状態を整える．

２）自己の職業経験を量･質ともに豊かにする．

3）看護職を価値づけられるような経験を重ねていく．

4）学生のロールモデルとなるような行動をとれるよう努力する．

5）研究遂行と研究成果の活用により教授活動を充実する．

6）看護実践能力の向上を図る．

謝　辞

本研究の結果は，全国の2年課程看護専門学校教員の方々から得られた貴重なデータに支えられている．データを提供して下さった看護学教員の皆様に深く感謝の意を表す．

引用文献

1）杉森みど里，舟島なをみ(2012)：看護教育学 第5版，353-354，医学書院，東京

2）亀岡智美，舟島なをみ，山下暢子(2006)：看護学教員の教育ニードの現状とそれに関係する特性の解明，日本看護研究学会雑誌，29(5)：27-38

3）日本看護協会出版会編集（2012)：平成23年看護関係統計資料集，84-103，日本看護協会出版会，東京

4）鎌田由美子，松田安弘，山下暢子(2012)：教員による2年課程看護専門学校学生のレディネスの把握に関する研究―看護学実習における教授活動に焦点を当てて―，第43回日本看護学会抄録集　看護教育：141

5）小山敦代,一戸とも子,大串靖子ほか(2007)：青森県の看護教育史に関する研究(第2報)　2年課程看護師養成所の特質と課題・展望，青森県立保健大学雑誌，8(1)：105-114

6）中込英利香,押領司民,河西光子ほか(2012)：看護専門学校の専任教員の研究発表に影響を及ぼす要因，日本看護学教育学会第22回学術集会講演集：173

7）芽野久美,森川三郎,河西みつ子ほか(2012)：看護師養成所専任教員の研究活動に対する意識調査，日本看護学教育学会第22回学術集会講演集：174

8）杉森みど里，舟島なをみ，小川妙子(1999)：看護学実習における教授活動　2年課程専門学校と3年課程専門学校の教員の比較，千葉大学看護学部紀要，19：19-25

9）看護行政研究会編(2013)：看護六法　平成25年版，保健師助産師看護師学校指定規則第四条二項，69-70，新日本法規出版，東京

10）細谷俊夫他編（1990)：新教育学大事典，2，「教員」の項，372，第一法規，東京

11）前掲書9)，保健師助産師看護師法　第十九条，9-10

12）前掲書9)，保健師助産師看護師法　第二十条，10

13）前掲書9),保健師助産師看護師法　第二十一条，10

14）前掲書9),看護師等養成所に関する指導要領について　第4項　教員に関する事項,281-283

15）Albert Bandura : Psychological Modeling. Aldine・Atherton, Inc, 1971；原野広太郎，福島脩美共訳(1975)：モデリングの心理学―観察学習の理論と方法―，8-9，金子書房，東京

16）Gerard　A.（2006) : Encyclopendia　of CAREER DEVELOPMENT Vol. 2, 701-703, SAGE Publications India, London

17）亀岡智美，定廣和香子，舟島なをみ(2002)：看護専門学校に所属する教員の役割遂行に関する研究―個人特性に焦点を当てて―，日本看護学教育学学術集会講演集，11：152

18）遠藤由美子(2004)：看護専門学校教員の授業評価活動の実態と教員特性，看護教育，45(7)：545-551

19）前掲書2)，27-38

20）前掲書17)，152

21）前掲書２），27-38
22）前掲書２），27-38
23）前掲書２），27-38
24）舟島なをみ，定廣和香子，松田安弘(2005)：看護学教員のロールモデル行動に関する研究―教員の特性と教員自身が評価したロールモデル行動の質との関係―,千葉大学看護学部紀要，25：17-25
25）前掲書２），27-38
26）前掲書17)，152
27）前掲書２），27-38
28）前掲書２），27-38
29）前掲書２），27-38
30）村上みち子，舟島なをみ，三浦弘恵(2009)：看護学教員の倫理的行動の質と特性との関係，看護教育学研究，18(2)：10-11
31）前掲書17)，152
32）前掲書２），27-38
33）前掲書17)，152
34）前掲書17)，152
35）前掲書２），27-38
36）前掲書24)，17-25
37）前掲書２），27-38
38）前掲書17)，152
39）前掲書２），27-38
40）前掲書18)，545-551
41）前掲書２），27-38
42）本郷久美子(2000)：教員の特性が看護学実習におけるロールモデル行動に及ぼす影響，看護教育学研究，9(2)：6-7
43）前掲書17)，152
44）前掲書２），27-38
45）舟島なをみ編(2007)：院内教育プログラムの立案・実施・評価―「日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システム」の活用―，40，医学書院，東京
46）舟島なをみ，村上みち子，亀岡智美ほか(2006)：教育ニードアセスメントツール―看護学教員用―(FENAT）の開発，看護教育，47(4)：350-355
47）舟島なをみ監修（2009)：看護実践・教育のための測定用具ファイル―開発過程から活用の実際まで―，280，医学書院，東京
48）前掲書45)，40
49）前掲書46)，350-355
50）前掲書46)，350-355
51）日本看護教育学学会(2011)：日本看護教育学学会研究倫理指針，看護教育学研究，20(1)，68，日本看護教育学学会，千葉
52）平井宜雄，青山善充，菅野和夫編(2011)：六法全書平成23年版Ⅱ，6426，有斐閣，東京
53）前掲書３），36-37
54）医学書院販売部 SP 課 (2012)：看護学校便覧2012，236-264，医学書院，東京
55）山澄直美，舟島なをみ，定廣和香子ほか(2005)：看護専門学校に所属する教員の職業経験の概念化，日本看護学教育学会誌，15(2)：1-12
56）市川須美子編(2013)：教育小六法平成25年度版，学校教育法第83条，132，学陽書房，東京
57）市川須美子編(2013)：教育小六法平成25年度版，学校教育法第124条，140，学陽書房，東京
58）Donna・Diers；小島道代，岡部聰子，金井和子訳(1988)：看護研究―ケアの場で行うための方法論―，1-9，日本看護協会出版会，東京
59）小川妙子，舟島なをみ，杉森みど里(1996)：看護学実習における教授活動に関する研究―教員特性と教授活動の関係に焦点を当てて―，看護教育学研究，5(1)：22-40
60）亀岡智美,廣田登志子,松田安弘ほか(2000)：看護専門学校に所属する教員の役割遂行の現状，日本看護学教育学会誌，10(2)：195
61）前掲書６），173
62）前掲書７），174

63）前掲書１），181
64）前掲書58），208-270
65）下中邦彦編（1981）：哲学辞典，「学」の項，228，平凡社，東京
66）杉森みど里(1998)：看護の専門職性と看護教育学研究，Quality Nursing，4(3)：4-7
67）森岡清美，塩原勉，本間康平(1993)：新社会学辞典，「職位」の項，751，有斐閣，東京
68）前掲書67)，「職務」の項，760
69）前掲書55)，1-12
70）前掲書65)，「価値」の項，242
71）見田宗介，栗原　彬，田中義久編(1988)：社会学辞典，「職業」の項，469-470，弘文堂，東京
72）湯浅　節，田村美子，白木智子ほか(2005)：看護学生が臨地実習で認識した倫理的意思決定場面とその支援者，日本看護学会論文集　看護教育，36：182-184
73）礒山あけみ(2008)：性と生殖に関する倫理教育　母性看護学におけるグループ討議による学びの構造，日本看護学会論文集　看護教育，38：231-233
74）神谷道代，迎千香子(2012)：精神看護学実習におけるプロセスレコードからの学び　看護学科３年課程と２年課程のレディネスの違いによる学びの特徴，日本精神科看護学術集会誌，55(2)：15-19
75）松田安弘，本郷久美子，中谷啓子ほか(2000)：看護学教員のロールモデル行動に関する研究，千葉看護学会会誌，6(2)：1-8
76）坂井恵子，近江和恵，松田静子(1990)：看護学生の臨床実習成果に関わる要因分析　実習成果に影響を及ぼす教員の関わりについての検討，日本看護学会収録集―看護教育―：275-278
77）村上みち子，舟島なをみ，三浦弘恵(2009)：看護学教員の倫理的行動の質と特性との関係，看護教育学研究，18(2)：10-11
78）廣松　渉，子安宣邦，三島憲一ほか編(2004)：岩波哲学・思想辞典，「学会」の項，264，岩波書店，東京
79）舟島なをみ，望月美知代(1995)：看護における研究成果の活用，Quality Nursing，1(11)：10-16
80）永山くに子：今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書，厚生労働省：1-6
81）前掲書80)，1-6
82）林美栄子(2010)：看護教員の看護実践能力についての自己認識　看護師養成所教員の実態調査，看護展望，30(9)：1064-1071
83）折山早苗，大丸美智子，横井万里(2008)：看護教員における看護実践能力に関する自己認識および短期研修の効果，看護展望，33(6)：62-63

The Current and Ideal States of Nursing Faculty Members in 2-year Nursing Diploma Programs with a Focus on Faculty Member Characteristics

Misuzu Ito[1], Yasuhiro Matsuda[2], Nobuko Yamashita[2], Misae Yoshitomi[2]
1) Takasaki City Medical Society Technical College
2) Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objective: The present study aimed to clarify the characteristics of nursing faculty members in 2-year nursing diploma programs, to describe the gap between the current and ideal states of nursing faculty members, and to identify issues related to closing this gap.
Methods: A postal survey comprising the Educational Needs Assessment Tool for Nursing Faculty (FENAT) and the Faculty Attribute Questionnaire was distributed to 721 nursing faculty members at all 120 2-year nursing diploma programs in Japan. Responses were obtained from 492 faculty members (collection rate, 68.2%) and statistically analyzed.
Results: The mean overall FENAT score was 76.1 points (range, 34-109). Among the FENAT subscales, the highest scores were obtained for "II. Conducting research and giving the fruits of research back to the community". A total of 13 variables related to the ideal states of nursing faculty members were identified, including "membership in academic societies" and "nursing competence", the latter of which demonstrated the strongest correlation.
Conclusion: The present findings identified six issues related to closing the gap between the current and ideal states of nursing faculty members, such as "enhancing teaching activities based on research implementation and results".

Key words: nursing faculty members, ideal states, 2-year diploma nursing program